

延慶本平家物語成親説話の叙法

— 物語と登場人物 —

山下 宏 明

一 歴史叙述としての軍記物語

軍記物語は、変革期の歴史を説話の方法を用いて叙述する物語である。「物語」を、虚構と言ひ換えてもよい。しかし、その場合の「虚構」とは、これまで指摘されて来たような史実に対する虚構、潤色、脚色といったものではない。勿論それをも含む。しかし今言ふところは、そうした脚色をも含めて、さらに広く歴史の叙述に見られる表現、構成の方法である。

事件がことばによって分節され歴史的事実なるものが選択的に決定され、まず原則的には時間の順に並べられて年代記、編年史となる。次にその編年史の中の事項が取捨選択されて、モチーフにより

結合され、小さな物語を作る。それがプロットにより構成され、歴史叙述がまとまる。その際に説話的解釈が構想をも決定することは、巻一の後半、白山事件の結末としての内裏炎上を京の人々の夢に、日吉山王の使者猿が火を放つと見たとするところに見られることは、すでにこれまでに指摘して来たところである。ただ注意すべきは、始めのことばによる分節の段階から作者や編者の理念や思想が参加しているのであるが、特に最終段階、作品としてのワク組・構成などにこの理念が強く働く。勿論これらの諸段階は、線条的に順序立って現れるのではなく、重なり合ったり、逆転したりする。その意味で事実の選択、説話的解釈から、歴史の叙述・順序・表現そのものが虚構であり、物語である。ところで、軍記物語論において主流をなすのは成立論である。それは作品の思想、内容を検

討するために、後から付加された夾雑物を排除して原典・作者に帰ろうとする作者志向である。現実には軍記物語を王朝物語や近代、現代の小説のように作者個人の創作に帰したいところから、編著者を支えた、背後の伝承、説話世界を重視し、その成立状況の究明を志向する。軍記物語のなりたちに、説話としての伝承が介在することは言うまでもない。特に『平家物語』の場合、説話・伝承との交流の中で数多くの、しかも多様な異本を派生した事実がこの事情を示唆している。そこから諸本の比較を通して、原形を究明するという方向を見せるに至るのもごく自然なことである。諸本の中でも特に各種説話・伝承を原初的に伝えていた可能性が濃いとされた延慶本⁽²⁾がその対象になるのも、これまた自然の趨勢である。代表的な成果が水原一の『延慶本平家物語論考』(一九七九年六月)、武久堅の『平家物語成立過程考』(一九八六年十月)であり、五味文彦の『平家物語、史と説話』(一九八七年十一月)・「合戦記の方法」⁽³⁾である。しかし武久の成果については、旧稿で指摘したように、延慶本の本文としての成親物語と、その資料になった伝承とは次元を異にする。これまでの延慶本による成立論が、しばしばこの間の経過を大胆に飛び越えていたこと、すでに書評に記した通りである。延慶本本文としての編著の段階で、上述した歴史叙述の場合同様に伝承の読み、選択、配列がなされて、物語としての形態をととのえていることを認めざるをえない。そのために、現存の本文を通して成立状況を推測することは可能であるにしても、現存の本文から成立当初の原本文そのものを抽出することはきわめて困難であると言わべ

きであろうとするのが、旧稿の意図するところであった。

かくて、今は、成立論の方向を第二義として保留し、延慶本の本文そのものの読みに徹してみるべきであろう。あるいは、その読みの過程で、本文成立の事情を示唆する現象にめぐりあうかも知れない。⁽⁶⁾

物語の読みは、事件の展開を読む。そのためにまず登場人物の動きを逐う。登場人物がわれわれ読者に与える印象の確認から始まる。その人物の動きは、当然、他の人物との関係、それを根底から規定している状況との関係に左右されるし、さらにその奥には、人物を逐う、物語の編著者の思想がひそんでいるであろう。読みは、まず人物像を物語が描く状況、他の人物との関係の中にとらえることで行わねばならない。軍記物語の説話にかかわる特殊性が、こうしたところに見られる。

二 成親の物語の状況

本稿は旧稿を受け、延慶本平家物語における成親が、物語本文の中でどのように表現され位置づけられているかを探るのを課題とする。延慶本本文において、物語が成親にどのような役割を課しているかを考えるためである。

成親は、どのような物語状況の中に登場するのか。それはやはり物語の巻一本の読みの課題である。延慶本巻一本の目次に即して物語の展開をたどってみると、

- 一 平家先祖之事
 - 二 得長寿院供養事付導師山門中堂ノ
薬師之事
 - 三 忠盛昇殿之事付關行事
付忠盛死ノ口
- まで、平家の王朝への登場の経過をたどり、
- 四 清盛繁昌之事
 - 五 清盛ノ子息達官途成事
 - 六 八人ノ娘達之事
 - 七 義王義女之事
- までは清盛たち一門の栄花と、それに伴う話として読める。続く
- 八 主上々皇御中不快之事付二代ノ后ニ
立給事
 - 九 新院崩御之事
 - 十 延暦寺与興福寺ニ額打立論事
 - 十一 土佐房昌春之事
 - 十二 山門大衆清水寺へ寄テ焼事
- は、王朝内の後白河・二条父子の不和から、その二条の崩御を契機に延暦寺と興福寺の対立を描くが、その中に院の周辺に、栄花をきわめる平家への反感が芽生えたことを示唆する。続く
- 十三 建春門院ノ皇子春宮立事
 - 十四 春宮踐祚之事
 - 十五 近習之人々平家ヲ嫉妬事
 - 十六 平家殿下ニ恥見セ奉ル事
 - 十七 藏人大夫高範出家之事
- は、第一段から第七段までの平家の栄花の延長線上にあり、その奢れる行動の一つとして、殿下乗合事件を描く。

これを簡単に要約するならば、平家の栄花と奢り、これに対する後白河法皇やその側近の不満を王朝内の葛藤、寺院間の確執の中に語って来たと言える。すなわち十五段「近習之人々平家ヲ嫉妬事」の一節、

法皇モ内々被思食ケルハ昔ヨリ今ニ至ルマテ朝敵ヲ平ル者ノ多
ケレトモカ、ル事ヤハアリシ貞盛秀郷カ将門ヲ討テ頼義カ貞任
宗任ヲ滅シタリシ義家カ武衛ヲ攻タリシモ勸賞行ハル、事受領
ニハ不過清盛カ指テシ出シタル事モ無テカク心ノマ、ニ振舞
コソ然ルヘカラネ

という法皇のつぶやきが、それまでの物語を集約的に語っている。この法皇の意を受けて、法皇自身ではなく、その側近の動きを描くのが物語である。すなわち(A)成親が企てる平家討伐の謀議と、(B)院に仕える北面武士の加賀鷯川寺における騒動、その結果として院と山門の対立を作り上げ、この間、(C)王朝の内紛から派生する山門と興福寺の対立を描き、その対立の中にも院に平家討伐の意図のあったことを示唆して、(A)につながるというのが物語の言説であり、成親を登場させるまでの状況である。

三 成親事件の背後にあるもの

——法皇と清盛の対立——

その具体的な事件が、十八「成親卿八幡賀茂ニ僧籠事」以下の鹿谷事件であり、謀叛謀議の現場に、物語は、

法皇モ時々、入セ給テ聞食入サセ給

とし、法皇が謀議に参画したとする。すなわち法皇は謀議のワキ役的存在であったとするのだが、この前、二条上皇の崩御、葬儀をめぐる山門と興福寺の衆徒の対立から、山門大衆が下落する場面、

何者ノ云出タリケルニヤ上皇(後白河)山ノ大衆ニ仰テ平中納

言清盛ヲ追討スヘキ故ニ衆徒都ヘ入ト聞ケレハ

と噂が流れたとし、後刻

法皇サルニテモ不思議ノ事云出ツル者哉何ナル者ノ云出ツラム

ト仰有ケレハ西光法師カ候ケルカ天ニ口ナシ人ヲ以テイハセヨ

トテ以ノ外ニ平家過分ニ成行ケハ天道ノ御計ニテト申ケレハ

と、側近の西光が公言したとする。物語に即する限り、法皇は関知し

なかったのだが、少なくとも清盛が、その噂により法皇を疑ったこ

とは確かである。このことがあったからであろう、後日、多田行綱

の密告により鹿谷陰謀が発覚した際、清盛は

抑此事(謀議)ハ院ハ一定被_レ知食タルカト宣ケレハ

多田は、

仔細ニヤ及候大納言ノ軍兵被_レ催候シモ院宣トテコソ催サレ候

シカ

と答える。この多田の態度は、

有ノマ、ニハ指過テヤウノサマノ事共取付テ細ク申ケレ

ハ

すなわち物語自体が誇張があるとして、これを事実とは見られないが、少なくとも清盛は、鹿谷謀叛を山門騒動と一連の事件として理

解していて、法皇への不信感を強めたはずである。だからここの直後、檢非違使安部資成を院御所へ送って、多田の密告の真偽を確認させたのである。法皇の態度がどうであったかはとにかくとして、このような不穏な状況を造りあげた原因として、前の西光の発言にもあった

平家過分ニ成行ケハ

という事実があったことは、何よりも物語が作品の冒頭から語り続けて来たことであった。物語によれば、奢れる平家に入々の不満がつり、平家討伐の陰謀が企てられる状況があったにもかかわらず、廿三「五條大納言邦綱之事」で、清盛は、自分に「執入テサマノ宮仕ケル上日コトニ何ニテモ一種ヲ奉」る邦綱を重く用い、「子息一人入道ノ子ニシテ経邦ト申付テ侍從ニ成サレヌ」。また重衡を婿にもし、この五條中納言邦綱を大納言に昇任させた。当時の邦綱は「一ノ中納言ニテ御坐ケレトモ」、

第二ニテ中御門中納言宗家卿、第三ニテ花山院中納言兼雅卿、

此人々成給ヘカリケルヲ止テ

清盛が邦綱を推したと言⁸⁾。邦綱の昇任をここに記すのは延慶本と長門本のみで、延慶本(長門本)が、ここで清盛の奢りを批判しようとすることは確かである。ひき続き、平家とはかかわりのない北面の武士に

カクノミアル間ニ驕レル心アリキ

として、その奢りを批判し鶴川寺事件を記した後、

卅二 高松ノ女院崩御之事

か、少なくとも清盛は、鹿谷謀叛を山門騒動と一連の事件として理

卅二 高松ノ女院崩御之事

卅三 建春門院崩御之事

卅四 六条院崩御之事

を記して、

加様、二、打統天下ニ嘆ノミ多ク人ノ心ノ定ラサル事ハ偏ヘ、ニ平家ノ一門ノミ榮テ一天四海ヲ掌ニ拳テ先例ニ違ル務ヲ申行ヘル故トソ内々ニハ申アヒケル

と、一連の不祥事の原因をも平家一門の奢りに求める。平家の榮花が当時の状況を狂わせたとするのである。事実、続いて

卅五 平家意ニ任テ振舞事を立て、

平治ノ逆乱ノ時マテハ源平両氏肩ヲ並テ互ニ朝敵ヲ被鎮キ此両氏皇化ニ随ヒ奉ル歟ト見シ程ニ平治以後源氏滅テ平家奢テ恐ル、方無シ……

と、その批判を総括している。ちなみに長門本は高松女院、建春門院、六条院の崩御をここに記すけれども、延慶本に見るような、一連の不祥事を平家一門の奢りに帰す一文を欠き、延慶本の卅五段に相当する本文をのせない。そのいずれが本来の形態であるかはとにかくとして、延慶本が巻一本の後半、他の諸本では直接には平家にかかわらない鶴川事件から山門強訴の事件をも、一連の不祥事件として平家一門の奢りに原因を求めようとする解釈を見ていることが指摘できる。この文脈からすれば、他の諸本では院当局の対応の拙さに原因を求める安元三年四月二十八日の内裏炎上まで、平家一門の奢りに原因を求めることにならう。延慶本編者は、このように

経過を理解している。

以上を要するに、法皇の動きについては不明確であるが、清盛ら平家一門の奢れる行為が法皇を刺激した、少なくとも清盛はそのように理解して法皇に不信感を持ったとする。廿三「邦綱の昇進、卅二、卅三、卅四の宮中の不幸、卅五「平家意ニ任テ振舞事」など、延慶本独自の説話の配列、採り込みが物語をこのように読ませる。説話を扱う軍記物語の構成法がこのように見られる。

この山門事件から、その責めを問われた座主明雲の流罪、大衆の奪回事件の間、

成親卿ハ……私ノ宿意ヲハ押ラレケリ

という。謀叛を成親の「私ノ」宿意というのだが、事実は法皇が参画していたらしいこと上述の通りである。そして法皇をして平家討伐の謀叛に参加させたものこそ、平家一門の奢りであったとするのが延慶本の物語である。

四 法皇の思いを広言する西光

物語でこの法皇の胸の中の思いを代弁し、広言する者として、側近の西光がある。

巻一本の鹿谷謀叛から、一時物語を中断する鶴川寺事件、山門事件、座主奪回事件を挟み、謀叛の発覚に及んで改めて重要な役を演じるのが成親であり、西光である。巻一末の謀叛発覚以後、この兩人の対応のしかたは、きわめて対照的になるのだが、しかも兩人は

系図上、藤原北家、魚名流正二位中納言家成の子息の兄弟である。実は西光は後白河院の側近信西の乳母子で、勅命により家成の養子になり、信西同様、院の側近になったらしい。謀叛の発覚後、清盛じきじきの訊問を受けた西光は、居直って

殿ハ故刑部卿殿ノ嫡子ニテ渡ラセ給シカトモ十四五歳マテハ叙爵ヲタニモシ給ハス冠ヲタニモ給ラセ給ハテ繼母ノ池ノ尼公ノアハレミテ藤中納言家成卿ノ許ヘ時々申ヨリ給シ時ハアハ六波羅ノフカスミノ高平太ノ通ルハトコソ京童部ハ指ヲ指シテ申シカ

と抗弁する。
この西光は事件発覚の前、山門強訴事件の張本、座主明雲が責めを問われるところで、

加賀国ニ座主ノ御坊領アリ師高是ヲ停廢之間其宿意ニ依テ門徒ノ大衆ヲ語テ訴訟ヲ出ス已ニ朝家ノ御大事ニ及之由西光父子讒奏之間法皇大ニ逆鱗アテ

と言う。「西光父子」とは西光と加賀の国司師高を指す。その師高が任地であって、莊園の問題をめぐって、座主の所領に圧力をかけた、いわゆる鵜河寺事件を指す。そのまき返しを山門が行った、それが朝廷の大事を招いたとする西光の院への讒奏である。この西光父子こそ、院の寵愛を背後に「驕レル心」（一本の廿三）ある北面の武士である。西光の讒奏・挑発に乗り怒った法皇が清盛を始めとする人々のとりなしを振り切って座主を改易し流罪に処す。これを不満とする大衆が座主を奪回する。事を知った法皇は

イト、安カラス被思召ニケル
その上さらに、西光がひそかに

昔ヨリ山門ノ大衆猥キ訴訟仕ル事ハ今ニ始メネットモ未タ是程ノ狼藉承及ハス今度ユルニ御沙汰有ハ世ハ世ニテモ有ヘカラス能々御誠有ヘシ

と法皇を焚きつける。上述した通り山門と興福寺との対立の場面でも、法皇に平家討伐の企てありとの噂をこの西光が「天ニ口ナシ人ヲ以テイハセヨ」と広言していた。西光は物語で一貫して状況を見通して、法皇を挑発し、その本音を引き出す役割を演じる。結果として法皇のかけを薄くする役割を演じるのであるが、この西光を、身ノ只今ニ滅セムスル事ヲモ願ミス山王ノ神慮ニモ不憚加様ニノミ申テイト震様ヲ惱シ奉ル浅猿事ナリケリ

と、この後の謀叛発覚を見通して批判する。記録性が強く、編年体を基本とする軍記物語において、この種の予告にはテクストの編者の強い思いが込められるのであるが、ここで西光が当面の山門事件に関わりを有することは勿論のこと、その前の成親の陰謀にも参画していたことを銘記するのである。はたせるかな、西光が捕らわれると、清盛はじきじき訊問して、日頃の法皇の北面の処遇に関する不満を

アレ程ノ奴原ヲ召上テナサルマシキ官職ヲナシタヒテ召仕ハセ給之間ヲヤコ共ニ過分ノ振舞スル者哉トミシニ合セテと非難し、

剩ヘ此事ニ根元与力ノ者ト聞置タリ

不満とする大衆が座王を奪回する。事を知った法皇は

刺へ此事ニ根元与力ノ者ト聞置タリ

と責める。言うまでもなく「此事」とは平家討伐の謀叛を指す。鶴川寺事件と鹿谷事件とをつなぐ者としてこの西光がある。清盛に対する答弁が西光らしい。

院中ニ被_レ召仕身ニテ候へハ執事別当新大納言殿ノ院宣トテ被_レ催候シ事ニ与セストハ争カ申候へキ

と聞き直る。しかも後白河法皇の御意を帯する執事別当成親の指示のままに行動したと言いつるのである。ともすれば曖昧に事件の陰に隠れそうになる法皇を事件の当事者として押し出すのも西光である。そしてこの法皇や成親のとった態度をも、相手が成り上がり者の平家であつてみれば当然のことだと言いつける。これまで法皇を挑発するかのように、それゆえに事件の前面に出ることのなかった西光が、清盛と対決するに及んでその本心を明かすというのが物語の西光である。そして西光にそう云わせた原因として平家一門の奢れる行動があり、平家の専横に対する法皇の不満のあることを、物語は語つて来た。このように西光は、物語を総括しながら法皇の思いを強く押し出す役割を演じている。この西光と対照的なのが成親である。

五 父を抑える重盛

この成親にかかわるのが平重盛である。言うまでもなく清盛の長男。これは物語自体が記すところだが、その妻は成親の妹であり、嫡男維盛の妻としても成親の娘を迎えている。その重盛は、二条上

皇の葬儀の後、山門と興福寺の争いの中に、後白河法皇に平家討伐の企てがあるとの噂を聞き、清盛が狼狽した時に、

此事ユメ〜御色ニモ御詞ニモ出サセ給ヘカラス人々心付テ中
〜アシキ事也叡慮ニ背給ハス人ノ為ニヨク御坐サハ三宝明神
ノ御加護有ヘシサラムニ取テハ御身ノ恐アルマシト
と父をたしなめ、父をして

兵衛督（重盛）ハユ、シク大様ナル者哉

と感嘆させた。ここで重盛は、噂の真偽について判断を下していない。平家の栄花を語つて来た物語の言説を帯しているはずの重盛は、ただ平家一門の置かれている状況を考へてとるべき態度を言つたにとどまる。それを清盛をして「大様ナル者哉」と言わせたのであつて、この重盛像に編者の理念が見られることは確かである。この重盛像をこれまで作者の思想を代弁する理想的人物とし、「作者の理想的人物は文学としては失敗しやすい、……その一例である」とするのが一般であつた。その判断に誤りはないのだが、対する法皇や成親の存在を考へ、一門の栄花を自覚する重盛の役割を考へる場合、それを編者の思想として批判するのは当たらない。この理念を抜きにして物語は成り立たないから。多田行綱の密告により召喚された成親は、清盛から、平治の乱の際の恩をも忘れる忘恩の徒、「人ノ皮ヲキタル畜生トハイヘ」となじられながら「身ニ取テハ全ク誤タル事ナク候人ノ讒言ニテソ候ラン」と申し開きする。この後、重盛が

内大臣（重盛）此後イト久アリテ烏帽子直垂ニテ子息ノ少將

(維盛) 車ノ尻ニノセテ衛府四五人隨身ニ三人斗召具テソレラモ布衣ニテ物具シタル者一人モ具セシテノトヤカニテヲハシタリ

と登場する。前に清盛をして「大様」など言わせた重盛像は、この「ノトヤカ」な登場のあり方にも一貫している。その重盛を成親は「地獄ニテ地藏菩薩ヲ見奉リタラム」にも過ぎた思いで迎え、「是ハイカナル事ニテ候ソ誤タル事候ハヌ物ヲ」と言う。成親がこのように言うわけは後に成親のところへ解読するが、巻一本の後半以後、物語を読み進めて来たわれわれ読者にとって、成親が事件に重要な位置を占めて来たことは明らかである。成親の弁明を重盛は「人ノ讒言ニテソ候ラム御命斗ハ申請ハヤトコソ思給へ」としながら、さすが「ソレモイカ、候ハンスラムトタノモシケナク」答えるほかない。事実、この後、重盛は父清盛に、

大納言ヲ失ハン事ハ能々御計候ベシ

そのわけは、成親が代々「君ノ御イトヲシミノ者」であるし、讒言によって無実の刑に服した例があるからだとするものだった。この後、清盛が法皇その人の責めを問おうとするところで再び重盛と談合するが、清盛は西光が白状したところとして、

此間ノ事ヲ西光法師ニ委ク相尋候へハ成親卿父子カ謀叛ノ企ハ枝葉ニテ候ケルソ真実ニハ法皇ノ御叡慮ヨリ思食立セ給御事ニテ候ケリ大方ハ近来ヨリイトシモナキ近習者共カ折ニフレレ時ニ随テサマノノ事ヲ勸申ナル間御軽々ノ君ニテ渡ラセ給フ

ともすれば、回りの近習たちのことばに乗りやすく軽率な(清盛が

そう見るのであるが)法皇こそが張本人であるとし、法皇への憎悪をあらわにする。この清盛の思いを知った重盛は、父の主張を全面的に否定するのではなく、法皇の行為はさることながら、朝恩を重んじるべきだと主張する。その対応は、苦渋に満ちている。ここで大納言(成親)以下ノ輩ニ所当ノ罪科被行候ナン上ハ退テ事ノ由ヲ陳シ申サセ給テ

と、重盛は成親らの救済は半ば観念して、法皇を清盛の矛先から護ろうとする。この再度の西八条訪問に際し、前回同様、武装は避けながら「重代伝リタル唐皮ト云鑑小鳥ト云大刀車ノ内ニ内々用意シテ持レタリ引サカリテ鞍置馬打セタリ」としたのも、この決意があったからである。しかも、この後、周の幽王の故事を想起して兵を召集するが、その本意は、

我身ニ勢ノ付歟付ヌ歟ノ程ヲモシリ且ハ又父ト軍ヲセムトニハ非ス父ノ謀叛ノ心ヲヤ思宥給トノ謀

であったらうと編者は想像する。重盛は儒教に基づく治政論と、あるいは一門を裂くことになるかも知れない示威行動を以て清盛の行動をおさえようとした。この後、中宮徳子の懐妊を機に、成経らの赦免により謀叛事件に一応の決着をつけ、徳子の皇子出産を見届けた後、重盛が熊野権現に祈ってみずからの寿命を縮めたのは、この重盛も結局は法皇と父清盛の間を調整しきれなくなった上でのことであったと読めるだろう。

以上のように考えると、鶴川寺合戦を契機とする山門事件、鹿谷謀叛の発覚のいずれにおいても、そのかげにある法皇と対決しよう

とする清盛と、これを抑えようとする重盛の兩人が舞台の主役の位置を占めることになり、成親はツレ役にとどまると云つても過言ではない。事実、この後、重盛の死が清盛を暴走させ、一門の滅亡を加速させる。だからこそ平家の物語なのである。

六 思慮無き成親

物語は、巻一本の後半、清盛ら平家一門の奢れる栄花に對する後白河法皇らの不満を背後に、院側近と北面の武士の行動を描いた。その状況を作り出す清盛と法皇、これに對処しようとする重盛の動きの中に成親が登場する。その契機は、安元三年（一一七七）正月、当時内大臣左大将だった藤原師長が太政大臣に昇るため左大将を辞任、そこに生じた後任人事であった。

後徳大寺ノ大納言実定一ノ大納言ニテ御坐ケルカ理運ニ充テ可ニ成給之由聞ケリ其外花山院ノ中納言兼雅卿モ所望セラレケリ殿三位中将師家卿ナト申御年ノ程ハ無下ニ少ク御坐セトモ成給ハムスラムト世間ニハ申合ケル程ニ、
 と言う。ちなみに『公卿補任』によると安元三年當時の大・中納言として、

大納言	正二位	源 定房	四十八
		平 重盛	四十
		右大将	
権大納言	正二位	藤原隆季	五十一
		藤原隆季	五十一

謀叛の發覚のいずれにおいても、そのかげにある法皇と對決しよう

がある。しかし実定は永万元年（一一六五）八月、権大納言を辞任し、この安元三年三月、大納言に還任、師長辞任當時は大納言でなかった。また師家が公卿に列するのは、さらに二年後の治承三年十月九日で、それも僅かに八歳の幼さであった。長門本にもほほ同文が見られる。「世間ニハ申合ケル程ニ」と言うから、物語によれば世間では実定、兼雅、師家が候補者として噂にのぼり、成親はその噂にものぼらなかつた。にもかかわらず成親は「平ニ被申」、「院ノ御気色ヨカリケレハ様々ノ祈ヲ始テサリトモト被思ケリ」と言う。ここでも法皇がかけを見せている。八幡に僧をこめての大般若經の真説に、神は拒否の意を示す。続けて賀茂上社への百度参り、重ねて上社での俊堯法印の真言秘法、下若宮での三室戸法印の吒呌尼の法のいずれにも神は拒否の意志を示す。三度にわたり神の拒否を語るの、物語が世評を通して成親を候補者の噂にあげていなかったことと通じる。そして結果的には、大納言右大将であった重盛が左大将に昇り、その弟宗盛が右大将に就く。この結果について物語は、

正月廿四日ノ除目ニ徳大寺殿花山院中将殿モ成給ハス況新大納

言、(成親)思、ハ、ヨ、ル、ヘ、キ、

と、一貫して成親に冷い。ここで補足しておくならば、前記師長が左大将を辞任したのがこの同じ正月廿四日であるから、事実としては重盛兄弟の両大将独占との間に時間の隔たりがない。しかし物語において、師長の左大将辞任の日付けを記していないので、物語の展開に支障はない。成親の僭上を語る物語が、この間の時間の操作を行った。そのみではない、物語は、これも事実とは錯誤のある、かねがね最有力候補とされた徳大寺実定の厳島参詣を描いて、その家臣源藏人大夫資基の思惑通り、清盛の心を動かし

糸惜々々サテハ厳島へ御詣有ケルコサムナレ浄海大明神権現ヲ深ク崇敬シ奉ル争カ権現ノ御威光ヲハ失ヒ奉ルヘキ重盛大将ニ上、ヨトテ大将へ押上テ徳大寺殿ヲ左大将ニ成奉ル

と言う。重盛はすでに右大将であるから「大将ニ上ヨトテ大将へ押上」は当たらない。この点、長門本の「とくとくしけもり大将あけよとて」とある方が破綻がない。とにかく、大将をめぐる清盛の専横は解消したことになる。つまり成親は、三度にわたる神仏への祈禱を拒まれ、さらには実定の任官により、都合四度にわたって大将の官への道を閉ざされたことになる。ここで成親は、

サテ新大納言成親卿被思ケルハ殿ノ中将殿徳大寺殿花山院ニ被越タラハ何カセム平家ノ二男ニ被越ヌルコソ遣恨ナレイカニモシテ平家ヲ滅シテ本望ヲ遂ムト思フ心付ニケルコソオホケナケ

とする。この第二十二段「成親卿人々語テ鹿谷ニ寄会事」の冒頭文

は、文脈からすればその前第二十一段「徳大寺厳島へ詣給事」を越

えてさらに前の段、第二十段の「重盛宗盛左右ニ並給事」を受けるはずである。現存の本文によって物語を読む限り、実定の左大将任官の事実を踏まえて成親は、失意の原因を清盛の奢りに求めることになる。しかもその成親自身が「殿ノ中将殿徳大寺殿花山院ニ被越タラハ何カセム」と言っているのだから、実定・兼雅・師家に比べて自身がさらにその下位に立つことを自覚していたわけで、しかも、不満を拭い切れず、これを平家に対する反感、怒りにすり替えたことになる。それは、これまでの物語の展開がそうさせるわけである。この理解が物語なのである。この成親の「オホケナ」き思い上がり、物語は、まず成親の官、大納言が父の中納言を越えていること、その子息や家来が朝恩にあきみちていること、平治の乱に危うく処刑されるところを重盛の恩により救われたにもかかわらず、その恩を忘れたことを言って批判する。そのあげくに

外キ人モ入ラヌ所(東山の鹿谷)ニテ兵具ヲ調へ集メ可然者ヲ語テ此宮ヨリ外ハ他事無リケリ

と、平家討伐を企てる。ある日、終日催した酒宴に成親は、

尋常ナル白布五十端取出テヤカテ多田藏人ノ前ニ置セテ……日
来談義シ申ツル事大将ニハ一向御辺ヲ憑奉ル

と多田に弓袋の料として白布を贈る。思いがけず倒した瓶子を咄嗚

に
平氏ステニ倒レテ候

と秀句を言ったのが成親であり、法皇に促された康頼が「当弁」

とする。この第二十二段「成親卿人々語テ鹿谷ニ寄會事」の冒頭文

と秀句を言ったのが成親であり、法皇に促された康頼が「当弁」

(答弁)に「平氏カ余リ多候テモテエヒテ候」と言ったのを、重ねて成親が「其ヲハイカガスヘキ」と問うたため、康頼は「ソレヲハ頸ヲ取ニハ不如カ」と返したのであった。すなわち万事、成親が謀叛の計画を張本人になって進めたというのである。俊寛が企てに参加したのも、もともと「ユ、シク心ノ武ク腹アシキ」京極大納言雅俊の孫で、「カ、リシ人ノ孫ナレハニヤ……僧ナレトモ心武ク奢レル人」であったこともあるが、実は成親のもとにいた美女に通ったため「大納言(成親)モ隔ナク打憑ミ語」らったのであった。このように謀叛の首謀者であったにもかかわらず、多田の密告により平家一門が清盛に召集され、ついでその使者が成親の召喚に訪れると、成親は

哀レ是ハ例ノ山ノ大衆ノ事ヲ院ヘ申サムスルニヤ此事ハユ、シク御憤深ケナリ叶フマシキ物ヲナト思テ我身ノ上トハ露知らない。前の西光が

思テ

いち早く事情を察知するのは対照的である。うかつな成親が日頃よりひきつくるって西八条へ赴く姿を「其モ最後ノアリキトハ後ニコソ思ヒ合セ給ケメト哀也」とする。後日を取って語ると先説法は、やはりこの編者の成親の思い上がりへの批判を示す。

西八条へ召喚され「一間ナル所ニヲシコメ」られた成親は、

良久アリテ内ノ方ヨリ人ノ足音高ラカニシテ来ケレハ大納言ハ只今失ワレナムスルヤラムト肝心ヲケシテ居ラレタリケルニ

実は清盛の登場で、怒る清盛は、平治の乱後、重盛の恩により処刑を免れた、その時、成親は、「七代マテノ守ノ神トナラムト手ヲ合テ泣々宣シ事ハ忘給タルナ」「サレハ何ノ科念ニヨリテ当家ヲ可滅之由ノ御結構アリケルヤラム」と、その忘恩をなじられる。成親は、「涙ヲ流テ慙身ニ取テハ全ク誤タル事ナク候人ノ讒言ニテソ候ラン委ク御尋アルヘク候」と逃げをうつ。たまりかねた清盛が「イハセモハテス西光法師カ白状マヒラセヨ」と「成親卿ヲ始トシテ……一事トシテ漏ル、所」のない白状を以て追い詰める。この場の成親の態度も、前の「少モ色モ変セスワルヒレタル気色モナ」かった西光とは対照的である。この成親評の行き着くところとして、

十五 成親卿無思慮事

大方此大納言ハオホケナク恩慮ナキ心シタル人ニテ人ノ聞トカメヌヘキ事ヲモ顧ミ給ハス常ニ戯レニカキ人ニテ無墓事共ヲモ宜ヒ過コス事モ有ケリ(源平盛衰記に「戯れ事にも由なき物言ひすごす事も有りけり」とする)

ときめつける。すなわち、院に仕える坂東大夫こと中納言親信のいやがることを軽率に法皇らの面前で指摘したため、逆に「平治ノ逆乱之時此大納言(成親)ノ事ニ合レシ事」と返され、成親は「顔気色少シ替テ又物モ宜ハサリケリ」、その場を見ていた資賢が「後ニ……兵衛佐(親信)ハユ、シク返答シタリツル者哉」と言ったという。「後ニ」は、その法皇面前での事件があった日の後のことである。ところが、物語現在の安元三年当時から見れば、過去の事を回想する複合的錯時法が見られる。やはり編者の成親評が露出したものであ

る。

七 成親の身を滅ぼしたも

成親が清盛の訊問を受ける場面の後、焦点はその北方や子女の不安を語って、焦点は再び成親に帰って妻子の身の上を不安に思う成親の思いに絞る。上述したように、この縁戚関係から重盛が重ねて成親の助命のため奔走するのであり、さらに成親の子息成経が召喚されるに及び、清盛の弟、教盛が、これもその娘を成経にめあわせていたことから成経の助命に奔走することになる。物語は、平家に謀叛を企てた西光や成親の当然の成り行きを語るに留まらず、その縁戚関係から平家の内部にも重盛・教盛といった、栄花をきわめる一門の中であって、「恩愛ノ道」、その情に苦しむ者を描いている。これから後の重盛・教盛の行動には、この鹿谷事件を通して体験した恩愛の情がかけを落としてゆくはずである。平家一門の中で、法皇を護るために父清盛と対決して儒教倫理に貫かれた行動に徹し、それゆえにみずからの寿命を縮めざるをえない重盛と、「門脇」の号にふさわしく、

身ヲ捨テ(清盛の)御命ニ替リ奉ラントコソ思シカ是ヨリ後ナ
リトモ荒キ風ヲハ先防ムトコソ思給ヘ教盛コソ今ハ年罷ヨリテ
候トモ若者共アマタ候ヘハ御大事モ有ム時ハナトカ一方ノ御圍
トモナラテ候ヘキ

と言ひ、事実、後日、いわゆる六か度合戦において教盛一門の献身的な行動が見られるのである。

成親が平家討伐謀叛の首謀者であることは上述の通り明白である。しかし清盛の詰問に、西光とは対照的に無実の讒言だと言ひ張った。その成親を編者はどのような姿勢で語るのだろうか。かつて『将門記』の成り立ちを語りの方から考えた際に、その視点のとり方として、

- (1) 事件体験者として、その体験を表現する。
- (2) 事件を体験しながら記録者の域にとどまる。
- (3) 局外者ながら、さながら事件を身近に体験したかのように表現する。

(4) 全く傍観的に記録者に徹する。
の四つを考えた。延慶本の語り手のあり方として、旧稿にて、(1)の成り立たないことを指摘した。とすれば(3)の場合が該当するのだろう。事実、例えば流刑地へと旅立つに際して、種々流人にきまりの儀式が行われる成親を、

次ニ山城判官季助宣命ヲ合奉ルカ、ル事ハ人ノ上ニテモ未御覽
シ給ハシ増テ御身ノ上ニハイツカハ習給ヘキト御心ノ内推ハカ
ラレテ哀也

と、編者は成親に同情しながら編者としての位置を保持し成親に同化しない。そこに成親に同情はしながら批判を貫く編者の思いがある。それにしても成親の思いは

サテモ今マ朝敵ニ非スシテ配所ヘ向フコソ悲ケレ

であり、かつて嘉応元年（一一六九）十二月の平野庄神人刀傷事件の責めを問われながら、流刑の途中刑の執行を停止され赦された事を回想して、今回の謀叛事件が

是ハ君ノ御誠ニモアラス大衆ノ訴ニテモナシ

であり、朝廷や山門への畏れはあるものの、平家に畏れはないと、状況を把握していない。この点でも平家の力を理解の上で清盛にあらがった西光とは対照的である。前回同様にあてにしていた重盛が、上述の通り法皇をかばうことに専念して成親の救済は断念せざるをえなかった。編者はその成親について、一旦、逃れたかに見える嘉応事件の時の山王の怒りが、

人嘲リテ山門ノ大衆ニハノロハルヘカリケル物ヲトソ申ケルサ
レトモ其積ニヤ今カ、ル目ヲ見給フソ怖シキ神明ノ罰モ人ノ呪
詛モ疾モアリ遅モアリ不同ノ事ナリ

として、逆れば日吉山王の祟りによるものであるとする。前に平治の乱を回想したのは、平家に対する忘恩を責めるためであり、ここに嘉応事件を回想するのも、日吉山王の祟りを語るためである。事を専ら朝廷との関係でのみとらえている成親という人物を西光との対照のもとに語って来たのである。そして実は成親の理解として、平家討伐計画の主役は後白河法皇であった。軽率な成親はその尖兵を承ったに過ぎない。

成親が備前の小島に到着したその現地の光景、

民ノ家ノアヤシケナル柴ノ編戸ノ内ヘソ入給ニケル後ニハ山前
ハ磯ナレハ松ニ答フル嵐ノ音岩ニ摧ル波ノ声浦ニ友呼浜千鳥塩

路ヲサ渡ルカモメ鳥適指入物トテハ都ニテ詠シ月ノ光計ソ顔カ
ハリモセス澄渡リケル

は、松籟、波の音、浜千鳥、カモメ鳥、月光とおきまりの取り合わせによる類型表現を見せ、現地の描写としてはあまりにも現実性に乏しい。物語の世界で造りあげられたものであることは疑いない。この成親の処罪がその家族にも及び、やがて子息の成経が召喚される。しかしそれも

大納言ハ少シ窺ク事モヤ有ト覺シケレトモイト、重クノミナリ
テ少将（成経）モ福原ヘ召下サルト聞ヘケレハ体ヲヤツサテツ
レナク月日ヲスコサムモ恐アリ

と出家を考える。つまり成親へと集約する。目を京へ転じて
大納言ノ北方ノ北山ノスマヒ又押ハカルヘシ

北山に隠棲する妻子を語る。ここで家人、源内左衛門信俊を登場させ、この信俊を介して京と備前間の交流を語る。そして、この成親の出家と、信俊の下向が清盛の耳に入るに及び、

大政入道此事ヲ聞給テ宣ケルハ誰カユルシニテ信俊ハ下リ大納
言ハ本鳥ヲハ切ケルソ加様ノ事ヲコソ自由ノ事トハイヘ
と、

小松ノ大臣（重盛）ニハ隠シ給テ経遠カ許ヘ大納言急キ失フヘ
シトソ内々
指示することになる。

前に福原へ召喚された子息成経が、
油黄鳥へ被シ流シ其ノ弟共ノ少ク御ワスルモ安堵セスコ、彼コニ

逃隠給ナムト聞給テイト、心憂ク悲クテ日ニ随テハ思沈テ身モ
既ニヨハリテミへ給

そこへ前述の清盛から処刑の指示が下る。成親の身の回りの世話をしてきた智明という僧が、「山水木立優ナル」有木別所へと誘い出し、あらかじめ難波太郎俊定が設けておいた僧房に

渡シスへ奉テケリ初ハトカク勞リ奉ル由ニテ同七月十九日ニ坊
ノ後ニ穴ヲ深く掘ラセテ穴ノ底ニヒシヲ植テ上ニ仮橋ヲ渡テ其
上ニ土ヲハネカケテ年来フミ付タル道ノ様ニコシラヘテ置タリ
ケルヲ大納言入道知給ハテ通りサマニ其上ヲ歩給トテ落入給タ
リケルヲ用意シタリケル事ナレハヤカテ土ヲ上ニハネカケテ埋
奉リニケリ隠シケレトモ世ニ披露シケリ、

と処刑される。結びの一文が示す通り、現地からの情報を記録する形にとどまり、物語としての言説に欠ける。この後、京に残された妻子が成親の菩提を弔うことを語った後に、

其最後ノ有様モ都ニハサマノ一聞ケリ

として、「嘆ノ日数積テ……思死ニ死給タリトモ聞ユ又酒ニ毒ヲ入テス、メ奉リタリトモ沙汰シ又ヲキニ漕出テ海へ入奉リタリトモ申ケリ」とするのも種々情報の羅列にとどまり、編者としては前の(4)傍観的記録で、物語としての再構成は見られない。後日、経遠の二人の娘が共に「物ニ狂テ竹ノ中へ走入テ竹ノ切クヒニタウレ懸リテツラヌカレテ二人ナカラ一度ニ死ニケリ」とするのは、上述の穴埋め処刑の情報に呼応するもので、この間、種々情報があったのである。うけれども、その列挙に止まり、物語として十分な言説にはなっ

ていない。ともあれ、北方たち妻子が亡夫の後世菩提を弔うことを描くことを以て、成親の物語が完結すること、物語に一つの類型構造をなす。重盛を介しての、恩に背く謀叛の行動、その裏に日吉山王の祟りをおくことにより、成親の謀叛を、身の程をも弁えぬ無謀なるまいとして語り、その成親の軽率な所業がその妻子は勿論のこと、平家一門にも、この成親一家とかかわる重盛や教盛を苦境に追い込んだとするのが物語である。一人の人物が、どのような状況の中で、どのような事を行うか。それがどのような波紋を広げてゆくかを、一連の展開の中に関連づけて語り進めるのが、説話を越える物語である。勿論その中に、いわゆる史実の潤色も行われる。しかし単なる史実に対する虚構のみが物語ではない。

八 成経らの物語

この成親の物語とからまり、雁行して語られるのが成親の子息、成経らの物語である。成経の物語の一部が成親の物語に参加することと上述した通りである。成親の物語に重盛が参画したのと同じように、娘を成経にめあわせた教盛が参加する。教盛の娘への父子の情ゆえの婿成経の助命奔走、一時預かり、重ねて召喚から備前、結局鬼界島への流刑と進む。流刑地での生活に、成経の舅、教盛の扶持によるところから、始めは別の島にいた康頼、俊寛も一島に合流することになる。その意味で流人物語の中の成経物語の位置が大きいのだが、むしろ、島では同行した康頼の登場により、その子息基康

るうけれども、その列挙に止まり、物語として十分な言説にはなっ

のだが、むしろ、島では同行した康頼の登場により、その子息基康

をからめて出家の物語から清水観音の靈験談を語り、熊野権現の勧請から祝詞、卒塔婆流へと、万事が康頼を中軸として展開する。その成り立ちを成親物語と別次元に置き得るものかどうかは即断しがたいけれども、この間、熊野利生談と清水利生談が参加していることは確かである。本文批判の上でも問題をはらんでいるらしいこと、旧稿で論じたところである。

康頼を中軸とする流人物語と並んで、高倉帝の中宮徳子（清盛の娘）の懐妊からその祈願が要請される段階で、教盛が重盛を介して成経の赦免嘆願に動き出し、前の二つの利生談の主役であった康頼もこれに加えられる。その成経が赦されて帰洛の途中、吉備の中山に亡父の遺跡を訪ねて菩提を弔い、さらに入洛の直前、鳥羽の洲浜殿に亡父の盛時をしのぶが、その洲浜殿が、

住吉ノ住ノ江ヲ写シテ被造タリ

という。「写シテ」は長門本に「うつして」と仮名書ききになっていくこと、それにその竣工の酒宴の夜、住吉明神が現れて、

我年比秘藏シテ朝夕愛シ候住吉ニ住江ト申ストコロヲ此亭ニ被移候シ間住ノ江無下ニアサマニ成テ無カシロニナリハテ候ナムト存シ候テ其子細ヲ嘆キ申候ワムトテヨヒヨリ参テ候ツレと訴えているから、「写」は「移」の誤りと見てよからう。それはとにかくとして、この住吉明神が、この邸に度々御幸なつた法皇に禍をなし、

次年ノ夏ノ比ヲヒ住吉大明神ノ御トカメトテ上皇常ニ御ナヤミ渡ラセ御坐シケレハ御存命ノタメニ御出家

あり、

サレハ成親卿モ彼ノ明神ノ御タ、リニテ無幾程シテ備前国ノ配所ヘ下ラレケル

と言う。成親のこの度の悲劇を、住吉明神の祟りとしてとらえようとする、上述の成親物語とは別様の読みをなす物語である。成親と住吉明神との関係については、流罪のところでも、永万の頃、鳥羽殿への法皇の御幸に同行した際、住吉明神の影響のあったことを回想するが、この段をも含め、あるいは、その源流を異にするのかも知れない。しかし現存の延慶本のテクストからその形態を探り出すことは不可能である。

成親物語、康頼物語について注目すべきは、結局一人、鬼界島にとり残された俊寛の物語で、それは有王をワキ役とし、俊寛の娘をツレとする完結した物語を形成している。その源に成親物語などとは別次元の物語が存在したと考えることも可能であるが、延慶本の本文の課題からは越えてゆく。むしろ、成親の悲劇と俊寛の悲劇の後に、素性不明の、未完の山門大衆の騒動を描きながら、辻風の異変により大臣の慎みと兵乱を予告して、これまで清盛の独走を抑えてきた重盛の死去へと進め、

此大臣失ラレヌル事ハ偏ニ平家ノ運命尽ヌル故也とするのは、本稿の始めに指摘した巻一本の

卅五 平家意ニ任テ振舞事

に呼応するものであろう。延慶本本文の冒頭から、この平家一門の奢りを指弾する編者の批判の姿勢が強く見られると言うべきであらう

う。その一つの条件づくりをするのが成親の物語であった。しかも編者はその成親の悲劇を重盛をもちからめてみずから掘った墓穴とするために後白河法皇をよけて通ってしまった。そして重盛の亡き後、清盛の法皇への直接行動により、巻二本から、物語の陰にあった法皇を前面に押しだそうとするのが、これからの物語であるが、その検討は稿を改める。

九 ま と め

以上、素材としての説話の論の域を越え、物語が物語を進める登場人物として機能する成親の役割を検討して来た。軍記物語の場合、その成立論のための、素材としての説話の探索が行われる一方で、最近の表現論・物語論は、物語の言説を進める登場人物の機能の検討まで進めつつある。その一つの例を成親物語に検討して来た。

巻一の始めから語り続けて来た平家の奢りに不満を示したのが後白河法皇とその側近である。この法皇の胸の中の不満を公言するのが、法皇の恩寵に奢る側近の西光である。同じ院の側近でありながら、西光とは対照的に、現状を理解しないで、専ら法皇の恩寵に奢るのが思慮無き成親である。この成親と縁戚関係を結んだために悲哀をかこつのが平家の重盛であり教盛である。これら院側近の諸人物を奢れるとして描くことが、後白河法皇をかげに隠してしま¹³た。なお、須藤敬¹⁴によれば、『保元物語』において、古本の半井本

から金刀比羅本の生成の過程で、後白河がテキストの裏側に隠れてしまおうと言う。論じ来たった延慶本『平家物語』といかなる関連があるのか、将来の課題である。

注

- (1) 『平家物語の生成』(一九八四年一月) 五五ページ。
- (2) 高橋貞一・渥美かをるらの諸本研究の成果が指摘するところである。
- (3) 『軍記と語り物』25(一九八九年三月)。五味の方法についての評価は「平家物語論の動向」『説話・伝承とことば』(一九九〇年四月)に譲るが、一口で言って、文献史学者としての五味は、例えば『陸奥話記』の成立状況を念頭に、『徒然草』二六段で言及する物語成立論にひきつけて読み解こうとするものである。文献史学者としてもっともな方法であるけれども、物語としての歴史叙述の読みとしては、種々疑問をはらんでいる。
- (4) 『延慶本平家物語の展開法——『平家物語』成立論のために——』『文学』一九八九年一月。
- (5) 『書評 水原一 平家物語の形成』(『文学』一九七一年十月)。軍記物語論にこの種の成立論がしばしば見られることは、例えば第一類本『平治物語』の金王丸説話をめぐって、それを金王丸その人の伝承であるとする論などにも見られる。

- (6) その結論には従いがたいにしても、時枝誠記の『平家物語』はいかに読むべきかに対する一試論(『国語と国文学』一九五八年七月)・『平家物語の異本成立の過程に対する一考察——表現における合作の理論に基づいて——』(『国語研究』一九五八年十一月)は、方法論の提起として示唆に富む。
- (7) 春田 宣『平家物語成親説話の構成』(『国学院雑誌』一九六八年九月)は、この間に法皇側近の平家横暴に対する怒りとは別の成親の「私憤」を見ている。
- (8) 『公卿補任』によると、安元三年四(正)月廿四日、邦綱は権大納言に昇任し、その後には宗家と兼雅がひかえている。
- (9) 石母田正『平家物語』(一九五七年十一月)一九頁。
- (10) 『軍記物語と語り』(『日本文学講座』4 一九八七年五月)。
- (11) (12) 注(4)の論文。
- (13) 武久 堅『平家物語における後白河院の位置——屋代本編集句の問題点——』(『文学研究』30 一九六九年十二月)は、屋代本をめぐる、語り本の編集者が側近を対平家の前面に押し出し後白河院をへ機関の奥に包み隠したとするが、延慶本にも同じことが言えよう。この種の傾向は『平家物語』に限らないだろう。
- (14) 「保元物語並井本から金刀比羅本へ——後白河帝を機軸として——」(『藝文研究』一九八八年一月)。